

第2章 印旛沼とその流域に住む人々の暮らし

～家族で千葉県立中央博物館をおとずれる～

自然と人間のかかわり展示室で自然の中の生活について学習する。



お父さん、沼のまわりで昔の人々は、どのようにくらしていたのですか？

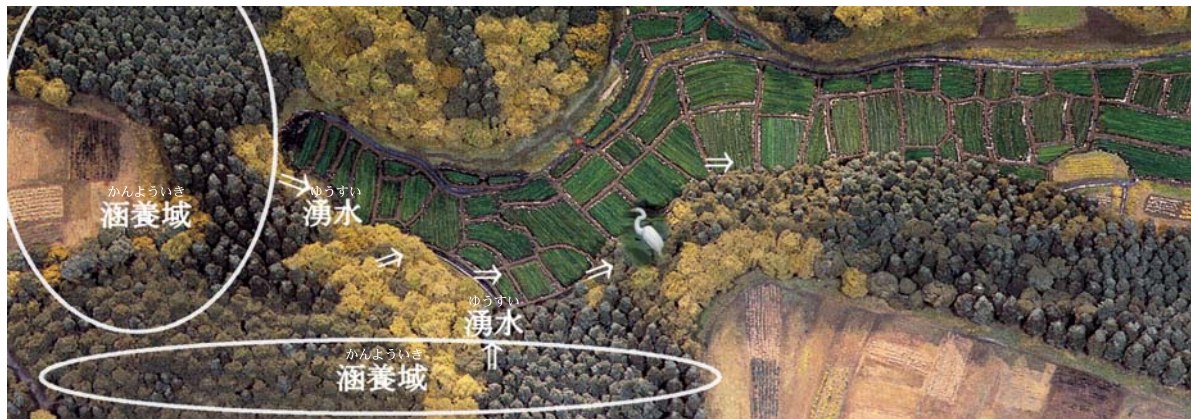
(父)

透，このパンフレットを見てごらん。生活に必要なものは、すべてまわりの自然から、もらって暮らしていたんだね。

(父)

かつて農村では、近くの林で得られる枝や木材を燃料や木工品の材料として、また、落ち葉などを田畑の肥料として利用し、作物を作っていた。降った雨は森林や畑の地下に浸透して地下水となり、わき出てくる湧水は水田のかんがい用水や飲み水に使われていた。

また、暮らしの中で出るゴミやし尿は、田畑の肥料として利用され、すべてを無駄にせず生活で営んでいたんだ。



(出典：千葉県立中央博物館展示模型より引用)

谷津田の水利

台地には谷津と呼ばれる特徴のある地形が見られます。

これは、かつて雨が大地を削ってできた谷に砂や泥が埋まってできたものです。

現在では、その多くが水田として利用されています。

この、水田とその両脇の斜面に残る雑木林は生物も多く、その林の斜面の下部から浸みだして水が湧き谷津田の自然を豊かなものにしていきます。

その水を、土地の高低を利用して小さな用水路で流したり、上の田から下の田へ畔に切り込みをつけて流すなどして無駄なく利用しています。

注 谷津田：谷津の低地を利用した水田のこと。

注 かんがい：作物を育てるために必要な水を田畑に送ること。

注 涵養域：雨水が地中に浸みこみ地下水をつくる緑地や森林のこと。

注 湧水：わき水・泉とも呼ばれ地中にある地下水が、自然に出口を見つけて湧き出したもの。



(父)

良子，中央博物館の資料・ランドサット写真の3枚を並べて見てごらん。

(良子)

お父さん，台地や谷津^{やっだ}，平野の特徴がはっきりとしたわ。



台地の分布ランドサット写真



谷津の分布ランドサット写真



平野の分布ランドサット写真

(出典:安田嘉純製作/千葉県立中央博物館蔵より引用)



台地の畑作



谷津田



平野の田んぼ

(父)

谷津^{やっだ}は，狭いけれど湧き水^{わきみず}が豊富で，田んぼにするのに好都合だった。毎日の労働はきびしかったけれど，田んぼの収穫は神様のおかげと思い，神社を建てて，祭りをやって神様に感謝し，みんなで楽しいひと時を過ごしたりした。

きびしい労働と，いこいの祭り・寄り合いをうまく組み合わせて，自然にいだかれながら，何百年も続く安定した暮らしをしていたんだ。

だけど，人が増え，せまい谷津田では多くの人を養うことができなくなって，人々はしだいに，印旛沼のまわりの広い平野(低地)に進出するようになったんだ。平野の水田は，洪水や日照りなどの災害を受けやすく，平野に進出した人々は，いろいろ苦勞して，工夫しながら水田を広げていったんだよ。

注 寄り合い：昔の農村で祭りや年貢の割り付けなどを相談した会合のこと。

夏休みに父の実家に家族で滞在する

～おじいちゃんから、水沼家の祖先が江戸時代に、印旛沼の堀割工事に従事した話を聞く～



(祖父)

良子，この辺の土地はむかし，台風が来ると必ず洪水になった。だから，私たちの祖先は，印旛沼の水をほかに流して，洪水をなくそうとしたんだ。残念ながら，その試みは失敗したがね。

おじいちゃん，昔の人々は，沼の水をどこへ，どのようにして流そうとしたのですか？



(祖父)

印旛沼の洪水は，外水（ソトミズ）と内水（ウチミズ）があったんだよ。利根川から水が逆流して起こす洪水が外水，鹿島川など，印旛沼に流れ込む川の水が多くなって起こす洪水が内水なんだ。洪水は，内水よりも外水のほうが恐れられていたんだ。

昔は，印旛沼の水が流れ出すあたりは鬼怒川で，当時の利根川は東京湾に流れていたんだ（2ページの図参照）。江戸時代に，利根川の流れを銚子の方向，つまり鬼怒川に流し込む工事が行われたんだ。それから印旛沼は，鬼怒川と利根川の上流に降る大雨の影響を同時に受けるようになり，外水の被害は一層激しくなったんだ。

村人たちは，そんな激しい洪水をなくし，同時に水田を広げようとして，印旛沼の水を東京湾に流そうと考えた。この印旛沼堀割工事と呼ばれる大工事は，今から280年ほど前の享保9年（1724）に，平戸（八千代市）の染谷源右衛門たちによって，私財を投じて始まったが失敗した。その後，天明と天保のころに，幕府の力で工事を進めたが，いずれも失敗した。この場所は，固い粘土層や，ぼろぼろのケト層があったり，水が激しく湧き出したりして，大変むずかしい工事だったけれど，父さんの時代になって，工事はやっと完成したんだ。大和田排水機場で水を一旦汲み上げる現代技術のお蔭だね。



(出典：天保期の印旛沼堀割普請(千葉市史編集員会)より引用)

注 堀割^{ほりわり}：水を流すために地面を掘って新しくつくった水路のこと。

注 普請^{ふしん}：土木作業などのこと。

注 ケト：昔のヨシ・マコモがそのままの形で埋まっているもの。



(祖父)

大雨の時、外水という利根川の逆流で起こる印旛沼の洪水が抑えられるようになったのは、私が生まれた大正11年に安食に水門ができてからだ。それでも万全ではなかった。内水を流し出す先がつまってしまったからだ。

おじいちゃん、印旛沼は、どうしてこんな形をしているのですか？

(祖父)

水門ができて沼の洪水対策は万全でなかったので、利根川に強制排水する印旛排水機場を作り、さらに、沼の水を東京湾へ流す開削工事と、これに合わせて長年の夢であった沼の干拓工事が戦後の食糧難の解決のため、昭和21年(1946年)に計画されたんだ。

その後、東京湾臨海部に工業地帯がつくられ、また東京へ通勤するのに便利が良いため住宅団地などがつくられて都市化が進み、それに必要な工業用水や水道水などの確保のため、印旛沼は水を供給する貯水池としての役割をかねて、印旛沼開発工事が進められた。

この工事は昭和44年(1969年)に完成して、沼は図のように2つに分かれた形となったのだよ。



昔の印旛沼(干拓前)



今の印旛沼(干拓後)

(出典:(独)水資源機構千葉用水総合事業所の概要より引用)

注 干拓: 沼や海などに堤防をつくって中の水を干して農地や陸地にすること。